

天高く馬肥ゆる秋。出張先で各地の新米をいただきながら、瑞穂の国に生まれた幸せをかみしめている。

子供時代、旅館を営んでいた曾祖母の家に行くと、大豆をパアッとまいて、「さあ、お箸で大豆を早くきれいに取ってごらん」と箸使いゲームをしたものだった。時々、「箸使いが見事ですね」と言われることがあるが、そのたびに甦る幼い頃の楽しい思い出である。箸は手先を器用にし、脳の活性化にもなるといわれている。

ところが、食育の研究者からお聞きした話だが、今、子供たちの7割以上が箸を正しく持てないという。私の子供の頃は三世代同居も多く、かつては箸使

参院議員 山谷えり子



〈やまたに・えりこ〉サ
ンケイリビンク新聞編集
長、国務大臣（国家公安委
員長・拉致問題担当）な
ど歴任。1男2女の母。

前に置くのは神様と自分との境を結ぶお役を果たしていただいているともいわれている。

自然の中で育まれた農作物や魚介類を、一箸ごとに感謝し祈るような気持ちで食した先祖たちの姿が思い浮かぶようである。私のふるさと福井には、江戸時代の末に活躍した橋曙覧という歌人がおられる。貧しい暮らしであったと聞けが、「たのしみは：」で始まる52首の独楽吟を詠まれている。「たのしみ

していると金木犀や銀杏の香りが漂ってくる。父は「家族が一つ屋根の下で食事ができる回数って案外少ないよ」と度々言いながら、一回一回の食卓を大切にする人であった。その言葉は、いつの間にか夫と私の言葉となっていたのだが、今や子供たちまでが言う言葉となっている。

今日も食事の席で私は孫に「金木犀の香りねえ。おじさんは10歳の頃、この季節になると『郵便屋さんの秋の風』って言

「祖父母力」で生活文化伝承を

いも含めて立ち居振る舞いやお作法などを教え伝えるのは、祖父母たちのお役目だったように思う。平成25年の内閣府の「家族と地域における子育てに関する意識調査報告書」によれば、子育て世代の約8割が祖父母の育児や家事の手助けが必要だと考えているというが、もっともなことと思う。忙しい共働きの核家族世帯では、食事や生活も慌ただしくなりがちで、正直なところなかなか暮らしの文化継承まで手が回らない。

漢字や食の研究家によると、箸は神の依り代、神事にまつわる神聖なものとされてきたという。中国や韓国では箸は料理皿の横に置くけれど、日本では手

■ 解答乱麻 ■

は 妻子むつまじく うちつどひ 頭ならべて 物をくふ時
「たのしみは まれに魚煮て 児等皆が うまいうまうと いひて食ふ時」という食事の風景もあって、きつと美しい姿勢と箸の持ち方で器用に魚の骨を取っていたのだらうなあ、などと勝手に想像としては楽しい気持ちになっっている。

天皇、皇后両陛下が平成6年、米国をご訪問の際、当時のビル・クリントン大統領は「私は橋曙覧という歌人が好きです」と言って、「たのしみは朝おきいでて 昨日まで 無りし花の 咲ける見る時」という一首を伝えたそうである。

この季節、家族で食卓を囲ん

って、大きく息を吸っていたわ」と言いながら、さりげなく小さな手の箸使いをチェックし「家族が一つ屋根の下で食事ができる回数って案外少ないよ」を思い出している。ふと、金子みすゞの「もくせい」という詩「もくせいのほひが／庭いっぱい。／表の風が、／御門のところで、／はいろか、やめよか、／相談してた。」が想起され、心がふんわり和んでもくる。

四季の巡りの中で日本人の感性や精神性が育まれてきたことに感謝し、同居、近居、遠居とライフスタイルは違っても、おじいちゃん力、おばあちゃん力を発揮して生活文化を伝承していけたらと願っている。